

Title	中国における夢観の展開
Author(s)	上野, 洋子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47091">https://hdl.handle.net/11094/47091</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	うえの ようこ 上野 洋子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 20782 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	中国における夢観の展開
論文審査委員	(主査) 教授 湯浅 邦弘 (副査) 教授 高橋 文治 講師 辛 賢

#### 論文内容の要旨

本論文は、中国古代から明代に至る「夢」の観念の展開を考究したものである。全体は、第一章「中国古代における夢」、第二章「夢の生成論の変容－六朝を中心に－」、第三章「占夢における修徳論的夢観－『潜夫論』から敦煌解夢書へ－」、第四章「中国における夢観の理論的統合－『夢占逸旨』の反「真人不夢」論と夢の生成論を契機として－」、第五章「『夢占逸旨』の占夢理論とその意義」の五章から成り、冒頭に序論、巻末に総論を付す。分量は、400字詰め原稿用紙換算で 520 枚である。

まず序論で、中国の夢に関する先行研究を概観し、問題の所在と本論文の目的・構成などを明らかにする。

第一章では、先秦時代において夢がどのように捉えられ、記述されていたのかを確認する。①夢が魂魄との関係で捉えられていたこと、②夢の生成に「魂交」が関係していると考えられていたこと、③道家思想において「真人」は夢をみないとされていたこと（「真人不夢」）、④これらの諸問題が後世の夢理論の展開の基礎となったこと、などを明らかにする。

続く第二章では、六朝期における夢理論の展開について考察する。『世説新語』に見える「因」概念や道教文献における魂魄説を手がかりに、夢の生成論が、次第に人間探究の問題へと深化していく過程を明らかにする。

また第三章では、中国の夢の大きな特色である修徳論的夢観について考察する。特に、新出資料である敦煌解夢書については、その全体像を明らかにし、そこに見える占夢のシステムや内容上の特色を指摘し、後漢の『潜夫論』で明示された修徳論的夢観がその後も形を変えながら中国の基本的な夢観として継承されていることを明らかにする。

こうした中国の夢理論を集大成した書として取り上げるのが、明の陳士元の『夢占逸旨』である。第四章と第五章は、この『夢占逸旨』について考察する。まず第四章では、先秦時代において道家の夢観として特徴的に見られた「真人不夢」論がその後どのように展開したのかという観点から、『夢占逸旨』の思想を分析し、そこに、強固な反「真人不夢」論が見られることを明らかにする。

また第五章では、陳士元が夢の価値を高く評価し、『夢占逸旨』内篇において、夢の生成論を説き、占夢理論を展開すると同時に、『夢占逸旨』外篇において、古今の占夢の事例を類書の形式によって収集・整理していることを明らかにする。こうした検討結果を踏まえて、最終的には、『夢占逸旨』が中国における夢の集大成の書であり、夢理論の一つの到達点を示しているとの評価を下す。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、申請者の修士論文（平成 15 年度提出）、および『東方宗教』第 105 号（2005 年）に掲載された論文「『夢占逸旨』にみる陳士元の夢の思想」、『待兼山論叢』第 38 号掲載の「『夢占逸旨』外篇について」を基に、さらに書き下ろし三章分を加え、計五章に再編したものである。

中国の夢については、これまで、劉文英氏の『夢的迷信与夢的探索』以外に本格的な研究がなかった。申請者の論文は、このテーマによる本邦初のもつた研究成果である。劉文英氏は、中国の夢の歴史を「宗教」と「科学」、あるいは「迷信」と「合理」などという価値観で分析してきたが、そこには、基本的な方法論上の問題があった。これに対して申請者の研究は、そうした二分法によらず、中国の夢観の展開に沿って、柔軟に考察を進めようとしている。

特に、第二章において論究される『世説新語』の「因」概念についての考察は、夢の生成論の探究として評価できる。また、従来の夢の研究が、儒家または道家のいずれか一方に偏していたのに対して、申請者は、その両方に十分な目配りをし、第二章第二節では、道教における夢についても「魂」との関係から分析を加え、第三章第二節では、敦煌夢書における儒仏道融合の様相にも留意している。

また、第四章・第五章は、本論文の核となる部分であり、『夢占逸旨』の内篇・外篇全体について思想史的検討を加えた初の研究として高く評価できる。

ただ、本論文では、『夢占逸旨』に至るまでの「夢の通史」を執筆しようとの意識が強すぎたためか、対象とする範囲が広すぎて、完成度にやや疑問が感じられる章もある。また、同様に、第一章、および第二章第二節、第三章第一節のオリジナリティについても、それほど高いとは言えない。さらに、『夢占逸旨』を「夢理論の一つの到達点」とする結論についても、同時代における他の夢書や明末以降の夢の思想の展開などを考慮する余地が残されていると言える。

とは言え、本論文は、中国における「夢」について、思想史研究の立場から検討を加えた重要な成果であり、中国の天道思想、運命論、聖人観、人間観、魂魄の問題など、周辺の研究課題についても大きな展望を切り開くものである。よって、本論文を博士（文学）の学位に値するものと認定する。